

平成27年度 一般選抜前期日程 小論文

出題の意図と解答の傾向

【はじめに】

長文の読み解き1問と図表の読み解き1問の計2問で構成するのが、本学の小論文である。いずれもすなおに読んでもらい、感じたことや気づけたことをだいにして自分の言葉で、やはりすなおに表現してもらいたい。このような思いで作問してきている。

2時間という試験時間は、読み解きと執筆をいずれも自分にすなおに向き合いながらやってのけるには短すぎるのかもしれない。受験者が対応できるのであれば、長時間化したいものである。というのも、考えさせられたことや意見を求められているにもかかわらず、問題文や図表の中に見出したものを丸呑みすることに終わってしまっていると思えてならないからである。見出したものを消化して自分の言葉に変換するいとまなく回答欄を埋める作業に移らざるをえなかったとしか思えない答案の多さに、戸惑わされているのである。

それにつけても、国語力、それも基礎力がおおきに懸念されてならない。思い込み読みをしてしまっ
てはいやしないか、ふだんから気にする癖がなぜ身についていないのであろうか。きちんと書けているか気になってしかたがないはずなのに、どうして書きっぱなしでいられるのだろうか。ワンセンテンスでまとまりをもった内容を表現するはずなのに、200数十文字どころか400文字を超えるセンテンスを答案として示して恥じないのはどうしてだろうか。読み解けるかどうか以前に、大事なことがおろそかにされているようで深く懸念するものである。

以下、出題の狙いと回答傾向について、問題ごとにお示しする。

問題1

【出題の意図】

現代の若者は対面的なコミュニケーションが苦手だという話を聞くことがある。一方、今日、若者に取ってSNSは不可欠のものとなり、それを通じて、一日中、友人らと「会話」をしているとも聞く。受験生自身は、このようなコミュニケーション能力の「二重性」をどう考えているだろうか。もし、若者が内向きのコミュニケーション能力しか持たないとすれば、それはいったい何が原因であろうか。

掲載文で、著者は、そもそもコミュニケーション能力とは何かと問う。この問いに、著者自身は、「コミュニケーションを円滑に進める力ではなく、コミュニケーションが不調に陥ったときに、そこから抜け出す能力」であると主張し、さらに、現代社会のコミュニケーション失調を社会のマニュアル化と関連させて論じた後、コミュニケーション失調が長期的には社会制度の綻びを生じるとの持論を展開する。また、コミュニケーション失調から回復するために必要なことについて論じている。

問題1で受験生に求めたのは次の2点である。1点目は、掲載文の要旨を的確に読み取り、それをまとめること。2点目は、著者の意見に反論するということである。出題者としては、この2点から、受験生の読解力、作文力、論理的思考力、一般的知識の豊かさを知りたいと考えた。

<設問 1>

【解答のポイント】

解答としては、「現代社会に取り憑いた病」という言葉に凝縮される著者の現代社会に対する批判や危機感を関連箇所から抽出・整理し、簡潔にまとめれば良い。関連するのは次のような箇所である。

著者は、「マニュアルは精緻化するほどに浩瀚な書物となり、あるレベルを超えともはや『取扱説明書』の用をなさなくなる」というマニュアル精緻化自体の矛盾を指摘する。しかも、マニュアル信奉者はそのことに気づかないのだと言う。さらに重大な問題として著者が挙げるのは、「マニュアルを精緻化することで、僕たちの社会は『どうしてよいかわからないときに、適切にふるまう』という、人間が生き延びるために最も必要な力を傷つけ続けて」おり、「そのことの危険性に誰も気づいていない」という点である。このようなコミュニケーション失調（コミュニケーション能力の欠如）が、ひいては、社会制度に綻びをもたらすと著者は問題視する。

【答案の傾向】

全体として、重要箇所がどこであるのかはよく理解できていた。

ただし、その内容を正確に読み取れていないケースも目立つ。具体的には、①マニュアルの精緻化に関する具体例を列挙しているだけ、②コミュニケーション能力との関係について言及していない、③要素を並べ接続詞でつなげているだけ、といったものである。また、社会の制度設計にまで言及できている答案は少なかった。

<設問 2>

【解答のポイント】

さまざまな答えがありうる問題である。

論理の整合性、具体例の適切な使い方、文章力を総合的に判断した。

解答では、「著者の主張に反論しなさい」という問いに対し、どの点に、どう反論したかを明確にしなければならぬ。ただし、批判に終始した解答でなくても良い。例えば、「ここまでは同意できるが、ここがおかしい」というような建設的な展開もありうる。

【答案の傾向】

ほぼ全ての答案が、指定されていたように反論の形式を取っていた。

ただし、多くの答案は、例えば、「いったん口をつむぐこと」、「適宜ルールを破る」という著者の主張を表面的にしか理解しないままに反論を試みていた。

A. マイナスの評価をした答案のタイプ

以下のような内容を含む答案については評価を低くした。

- ①白紙や途中で終わっている答案。
- ②著者の主張を読み取れずに反論している。一例を挙げれば、著者はマニュアルの存在そのものを否定してはいるのに、そのように理解して解答をしている。
- ③著者のどのような主張に反論しているのかが不明確。
- ④著者の主張に対し全否定をした結果、とても支持を得られないような極論に達してしまう。例えば、個人の自由意思をすべて剥奪するような社会の肯定など。
- ⑤不適切な例示。法律をマニュアルの例とみなすなど。
- ⑥自分の主観的な意見を述べ反論とする。あるいは、反論の根拠が不明確。例として、「著者のようなタイプ人間が私は苦手なので、この文章の主張は誤りだ」、「ルールを破るのは良くない」、「日本人は集団主義的でモノが言えないから、グローバル社会で通用しない。だから聞き手にまわるのはダメ。」など。
- ⑦著者の議論の主旨を汲めず、著者の挙げた一つ二つの事例に対してのみ揚げ足を取るような反論をして終わる。例えば、「センター試験はやっぱり続けるべき」「著者のフランスでの対応は迷惑」などを反論の中心とする。

B. プラスの評価をした答案のタイプ

以下のような内容を含む答案については高く評価した。

- ①著者は個人と企業のような組織とを同列に論じているが、組織レベルのコミュニケーションにはマニュアル化が必要である。
- ②マニュアル化は公的なレベルにおいて進んでいるだけで、私的な領域では著者のいうコミュニケーション能力は低下していない。
- ③コミュニケーション能力の低下はマニュアル化ではなく、マニュアルの応用にかかわるものであり、マニュアルの設計そのものはやはり精緻に行うべきだ。
- ④部分否定などを取り入れ、著者の議論を建設的に展開しようと試みているもの。

【形式などの注意】

- ①理由をたずねる問いに適切な形式で答えていない。
- ②主述の不一致。
- ③少なからず誤字がみられた。例) 非難民(避難民)、倫機応変(臨機応変)、必用(必要)、困乱(混乱)、段回(段階)、関点(観点)、客意(容易)、決論(結論)、態力(能力)、輪を乱す(和を乱す)、反断(判断)、想談(相談)、決果(結果)など。

問題2

【出題の意図】

本学前期入試では、例年、図表の読み取りを伴う問題が一問出題されてきた。社会科学を学んでいく

際、データが含意するところを読み取るスキルは必須となる。受験の時点でどの程度のスキルを持っているかを見て来た。

本年は、日本社会における結婚のあり方の変容について、その来し方行く末を各種データに基づいて考える問題を出した。

この半世紀余りのあいだに結婚のあり方は劇的な変化を遂げて来た。晩婚化・非婚化、少子化、離婚率の上昇、男女の性的役割分担の考え方の変化、国際結婚の増加等々である。これについては『平成 25 年版厚生労働白書』も考察を加えている。結婚のあり方そのものを捉えることは極めて難しいが、同書からデータを選択・加筆して提示し、日本社会における結婚のあり方を多角的に見ることにした。

図表から読み取った事実に基づいて自分の議論を展開できるかを重点的に見たいと考えた。

<設問 1>

【解答のポイント】

晩婚化・非婚化についての問題となる。図表から「この 60 年のあいだに日本における結婚のあり方はどのような変化をとげたか」を問う問題である。

図表から読み取れることは多い。たとえば、次のようなことがあげられる。

- (1) 男女ともすべての年齢層において未婚率が継続的に上昇 → 晩婚化
- (2) 女性の 25 歳時における未婚率が急激に上昇している。 → 「結婚適齢期」の消滅
- (3) 50 歳時（とくに男性）の未婚率の上昇 → 生涯独身率の上昇（非婚化）

採点にあたっては、上記のなかでも全般的な考察である(1)が読み取れているかどうかを重視したいと考えた。また、単純に「晩婚化」と答えるのではなく、「男女ともすべての年齢層において未婚率が継続的に上昇」している事実を指摘したうえで「晩婚化」を指摘しているかを見たいと考えた。

【答案の傾向】

ほとんどの受験生が晩婚化を指摘していた。他方、未婚率が「男女とも」「すべての年齢層で」「継続的に」上昇してきたことをすべて指摘したうえで晩婚化と結論付けた答案はごくわずかであった。

その他答案について気づいた点をいくつか付言する。

- ・ 1950 年と 2010 年とだけを比較している答案が目立った。
- ・ 図表から読み取れることを書くという問題に対して、自分の意見を書く受験生がいた。
- ・ 15 歳時点で未婚率が 100% であることは当たり前ののに、これを指摘している答案があった。

<設問 2>

【解答のポイント】

非婚化・晩婚化の背景には経済的な問題もある。設問 2 は一連の図表から「若年男性の雇用形態、年収、既婚率にはどのような関係が存在するか」、またその背後にはどのような論理があると考えられるのかを問う問題である。

図表から読み取れることは多いが、設問で聞いているのは「雇用形態、年収、既婚率のあいだの関係」である。図表2から図表5はこの観点から読み取る必要がある。次のようなことが指摘できる。

- (1) 図表2 正規雇用者のほうが非正規雇用者よりも年収が高い傾向にある
- (2) 図表3 (若干の例外があるが) 年収が多いほど既婚率が高くなる傾向にある
- (3) 図表4 正規雇用者のほうが非正規雇用者よりも既婚率が高い傾向にある
- (4) 図表5 結婚への一番の(主観的)障害は結婚資金

そして、以上から、次のような推論も導き出されることになる。

- (5) 非正規雇用 → 低収入(これが結婚の障害) → 低既婚率 あるいは
正規雇用 → 高収入(金銭面での結婚の障害が少ない) → 高既婚率

採点にあたっては、一つ一つの図表を問題の趣旨に沿って読みとっているかどうか、そのうえで全体を貫く論理を構成できるかを見たいと考えた。

【答案の傾向】

差のつく設問であった。一つ一つの図表の読み取りを行わずいきなり推論を提示している答案、逆に一つ一つの図表の読み取りは行っても全体としての論理を構成できない答案が目立った。また、図表の読み取りについては、「雇用形態、年収、既婚率のあいだの関係」を聞いているにもかかわらず、これとは別のことを読み取ろうとする答案も多かった。

その他答案について気づいた点をいくつか付言する。

- ・雇用形態、年収、既婚率のあいだの関係、因果関係を十分に論述できていない答案が目立った。たとえば、「年収と既婚率とは密接な関係がある」というだけの記述では読み込みになっていない。
- ・雇用形態や既婚率の説明ではなく、年功序列の説明を行っている答案が目立った。
- ・4つの図表をすべて網羅していない答案が散見された。とくに図表5の見落としが多かった。
- ・ある図表について説明したあとで、別の図について「同様の関係がある」といって終わってしまっている答案が散見された。
- ・各図から一つわかることを書いているが、全体的な傾向や特徴をとらえていない答案が散見された。
- ・図表のタイトルを正しく読んでいない答案があった。
- ・女性は年収で結婚を決めているという答案があった。

<設問3>

【解答のポイント】

晩婚化・非婚化の背景には価値観の変化もある。図表6、7から結婚観、職業観の変化がみてとられる。ここまでで考えて来たことも参考にしながら、今後、「結婚のあり方」がどう変化していくのか考えるところを問う問題である。

図表から読み取れることは多い。たとえば、次のようなことがあげられる。

- (1) 図表6 「結婚してもしなくてもどちらでもよい」との考えは若い人を中心に支持を集めている。

(2) 図表7 女性は、子どもができて、ずっと職業を続ける方がよいと考える人々の割合が継続的に伸びてきている。

晩婚化・非婚化、女性の社会進出などを踏まえながら今後の結婚のあり方について論じてほしいと考えた。

【答案の傾向】

図表を読み取ったうえで、「今後も晩婚化・非婚化が進む」とする答案が多かった。設問の趣旨をふまえた解答と言える。ただ、結婚のあり方の変化は「晩婚化・非婚化」以外にもある。「夫は外で働き、妻は家庭を守る」といったそれまでの性的役割分担の変化も指摘できる。女性が職業をもつことと晩婚化・非婚化との関係などが論点となりうる。今後も女性が職業をもつ傾向は強まっていくため晩婚化・非婚化が進んでいくとした答案もあったが、今後は女性が職業をもつことと結婚することとがより両立しやすくなっていくであろうとの見通しを述べた答案もあった。

図表に全く言及しない答案もあったが、図表の読み取りの上で議論を展開している答案のほうに説得力の高いものが多かった。

また、「結婚のあり方」の変化について問うているにもかかわらず、少子化をどう防ぐかといった別の論点を論じる答案、変化の良し悪しについて論じている答案（事実と意見の混同）も目立った。

その他答案について気づいた点をいくつか付言する。

- ・二つの図表をうまく活用していない答案、また逆に二つの図表の説明だけで終わってしまっている答案が散見された。
- ・図表のタイトルを正しく読んでいない答案があった。たとえば、図表6・7ともに、上が男性、下が女性と理解しているという理解。
- ・図表6の読解で、何についての「賛成」なのか、一切言及しておらず、解答として論理的に意味を成していない答案があった。
- ・解答し終えていない受験生が散見された。

【まとめ】

全体として見ると、日本社会における晩婚化・非婚化の傾向、結婚することへの経済的障壁の存在などといった事実について、多くの受験生のあいだに予めの理解があったと言える。そのため、そのことがきちんと指摘されている答案が多かった。

ただ、出題者としては「図表から読み取った事実に基づいて自分の議論を展開できるか」という点を重点的に見たいと考えており、その点、不十分な答案が多かったのも事実であった。図表を読み取っていない議論、読み取っただけの議論、論理に飛躍のある議論などもみられた。

最後に、答案全体について、気づいた点をいくつか付言しておきたい。

- ・文章表現に稚拙さを感じる答案が散見された。「わかる（分かる）」「考える（考えらえる）」「思う」が繰り返し使われる、同じ文章内容が繰り返し使われる、主語述語の係り受けや、比較級の使い方など

の初歩的な文法にミスがある、である調とですます調が混在するなど。

- 誤字。増化(増加)、圧到的(圧倒的)、決果(結果)、安倍内閣(安倍内閣)、頂金(貯金)、前堤(前提)。
- 未完成の答案、文章が稚拙な答案が多かったのは、解答時間が不足したため、十分な推敲ができなかったことによるのかもしれない。

以上